



Title	三島由紀夫とヘミングウェイの比較研究：性の問題を を中心に
Author(s)	上垣，公明
Citation	大阪大学，2005，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45705
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていない ため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利 用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文につい てをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	上 垣 公 明
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 9 1 2 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 17 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	三島由紀夫とヘミングウェイの比較研究—性的問題を中心に—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 内 藤 高 (副査) 教 授 出 原 隆 俊 教 授 森 岡 裕 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、三島由紀夫とアメリカの作家アーネスト・ヘミングウェイの幾つかの作品を対比させて論じることによって、両者の共通性や独自性をより明確にすることを目指した比較文学の対比研究の論文である。序章、第 1 章「『仮面の告白』と『日はまた昇る』」、第 2 章「三島由紀夫の『禁色』とヘミングウェイの『エデンの園』」、第 3 章「三島由紀夫の『豊饒の海』とヘミングウェイの『海流のなかの島々』、『老人と海』」、そして終章からなる、400 字換算で約 520 枚の論文である。

本論文の特徴としては、「行動派作家」など様々な点で共通点が指摘されることの多い両作家に関して、具体的な作品を手掛かりとして、とくにセクシュアリティの観点から分析を試みたものである。第 1 章では、『仮面の告白』と『日はまた昇る』に関して、主人公の同性の理想像との一体化の現象、異性愛の否定、非日常的祝祭としての男性的ヒロイズムなどが論じられ、これらが両作品に共通することが強調されている。第 2 章では、『禁色』と『エデンの園』の「象狩りの物語」に共通する利害を伴わない男同士の絆のテーマや、こうした絆を妨害する女性、あるいはそれから排除される女性というテーマが、両作品を接近させるものとして取り上げられている。第 3 章では、『豊饒の海』と『海流のなかの島々』及び『老人と海』における男性の主人公たちの行為の「一回性」というテーマに重点があてて論じられ、これを補完するような再生（円環性）のテーマも両者に共通することなどが指摘される。申請者は、こうした分析を通して、両者に共通する「男女の位置づけにおける明確な対照性」、そして男性のヒロイズムを強調する手段として、プロットや劇的設定に関して、様々な〈性的〉要素が非常に意図的に導入されていることを特に強調している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は三島とヘミングウェイという直接影響関係のない二人の作家の多くの作品を比較して、大部の論文にまとめるという難しい課題に正面から取り組もうとしている。こうした努力はまず大いに評価すべきであろう。対比させるテキストの選択、何によって対比するかという対比の視座の設定などに苦心のあとが窺える。また提出者は本来英米文学を専門とするが、とくにヘミングウェイの作品の分析に関しては、積極的に最新の成果として注目すべき点も

少なからずあるように思う。『エデンの園』の分析、『海流のなかの島々』第1部「ビキニ」における息子の絵を描くことによる父子関係の結び付きの緊密化の指摘などは興味深いものがあった。

しかし同時に欠点もかなり窺える論文である。全体として対比研究が本当に有効に活きているか疑問もある。多くの場合、三島についての論とヘミングウェイについての論が別々に論じられ、並置されており、両者を本当にかみ合った形で論ずる有効な分析のしかたに物足りないところがある。例えば『海流のなかの島々』第3部における「男同士の絆」を論じている箇所、共通点を見ようとする余り、説明不足のまま『豊饒の海』の聡子と清顕の関係をそこに当てはめようとしている点などである。またヘミングウェイに比べて、三島の作品についての分析は、やや平凡で先行研究で既に語られていることを長くなぞっているところがある。また作家と作品を厳密に区別すべき箇所で行われていないという面もみうけられる。論文の形式面においても、分析のための用語の使い方や、引用のしかたの不十分さ、登場人物や批評家の人名の誤りなどかなりのミスが見うけられることも確かである。

とはいえ、困難なテーマにあえて意欲的に取り組もうとした努力は大いに評価すべきであろうし、一定のレベルに達した成果を充分に生んだ論文であることは疑いがない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。